グリゴリー・ヨッフェのベラルーシ論とアレクシエーヴィチ

塩川 伸明
（東京大学名誉教授）

1　はじめに

ベラルーシという国は欧米でも日本でもあまりよく知られていない（正直に言って、私自身、それほどよく知っているわけではない）[1]。そもそもあまり関心の対象にならないと言ってしまえばそれまでかもしれない。もっとも、ベラルーシは広義のヨーロッパの一角に位置し、バルト諸国・ポーランド・ウクライナなどと隣接する国として、それらとの比較――とりわけ対ロシア関係における共通性と差異――が問題になるという意味では、いわば間接的に関心の対象となることがある。そのためか、ベラルーシ自体については何の知識も関心も持たない政治家・ジャーナリスト・評論家などが、「欧州最後の独裁国」とか「ナショナリズムなき民族」といった紋切り型の言葉を繰り返し、それが世間一般にもかなり浸透しているように見える。

この国のことがあまりよく知られていないのは専門家が少ないというだけにとどまらない要因があるということを、グリゴリー・ヨッフェという人（ラドフォード大学教授）が指摘している。彼によれば、欧米における数少ないベラルーシ関連情報源は多くの場合、ポーランド出身もしくはベラルーシ最西部出身のベラルーシ・ディアスポラであり、彼らの意識は往々にしてベラルーシ本国のメンタリティと遊離しているため、彼らだけに依拠したのではベラルーシを理解することはできないという。

このヨッフェという人は、ユダヤ系ベラルーシ人の家系の出で、本人はモスクワ生まれ、モスクワ育ちだが、祖父母や伯父・従兄弟たちの住むミンスクを幼時より毎年訪れて、ベラルーシ社会を肌で観察し続けてきた経験を持つ。モスクワ大学卒業後、ソ連末期の1989年に出国してアメリカにわたり、アメリカの大学教授となった（その後も定期的にベラルーシを訪問しているとのこと）。ベラルーシ情勢に精通している数少ないアメリカの社会科学者の一人だが、エスニックなベラルーシ人ではないこともあり、ベラルーシ・ナショ

[1] 日本でベラルーシについて論じた文献は数少ないが、いくつか興味深いものがないわけではない。越野（2014）、服部（2004a, 2004b, 2008）、早坂（2013）、福嶋（2015）、松里（Matsuzato 2004）などがあり、概説書として服部・越野（2017）も出た。欧米では Guthier (1977a, 1977b), Marples (1996, 1999), Urban and Zaprudnik (1993), Wexler (1985), Zaprudnik (1989, 1993)などが代表的である。ロシアの研究状況についてはよく知らないが、Фурман и Буховец (1996)が興味深い。

ナリズム――実をいえば「ベラルーシ・ナショナリズムとは何か」ということ自体が大問題であり、アメリカで知られているのは複数の潮流のうちの一つに過ぎないとヨッフェはいう――から距離をおいていることが彼の観察を特異なものにしている。

彼は21世紀初頭に、*Europe-Asia Studies* 誌に3回連載という異例の長編論文を書き（Ioffe 2003a, 2003b, 2004）、それをもとにして、『ベラルーシを理解すること』（Ioffe 2008）という著書（以下、本書という）を書いた。いろいろな意味で刺激的かつ論争的な――欧米における代表的なベラルーシ研究者たるザプルドニクおよびマープルズへの辛辣な批判を含む――書物である。

欧米で優勢なベラルーシ観が濃厚に反ロシア・反ルカシェンコであるため、それと距離をおくヨッフェの議論は、外観的にいうと、あたかも親ロシア・親ルカシェンコ――そして間接的には親プーチン、また歴史的には親ソ連――であるかに見えるところがある。本人の意図としては、一方の極に他方の極を対置するというのではなくて、多様な情報や論争を見比べながらバランスのとれた議論を出そうと努めているのだろうが、何が適切なバランスかというのは難しい問題であり、結局のところ主流と逆の極論に陥っているのではないかといった批判にさらされる可能性は否定できない。論争の書であり、決定版というわけでないのは、ことの性質上、やむをえない。それにしても豊富な情報に基づいて綿密な議論を積み重ねていることは明らかであり、結論への賛否はさておき、知的刺激に富んだ作品だということは確言できる。

なお、ヨッフェが長らく暖めていたソ連出国の考えを実行に移したのは、まさにソ連が民主主義に進もうとしているペレストロイカ期のことだった。逆説的ながら、その変化に伴って安全の感覚が失われたからだと彼はいう。ソ連では草の根の秘かな反ユダヤ主義は絶えることなく持続していたが、それが公然たるユダヤ人への攻撃という形をとることは――戦後初期の「反コスモポリタニズム」キャンペーンの時期を除き――基本的に抑制されていた。その抑制が「民主化」の始まりとともに解除され、安全の感覚が失われたというのは皮肉な話である。

ヨッフェは出国時にソ連国籍を剥奪され、アメリカに難民として受け入れられた。そうした経験をもつ者として、ソ連体制の欠陥は肌身で感じて、よく承知している。しかし同時に、ソ連時代の全てが捨て去るべきものだったとは思わないとも彼は書いている。ソ連体制下で受けた教育は種々のイデオロギー的特殊性を帯びていたが、全く無価値というわけでもなかったというのが、そのもとで育った彼の実感のようである。彼はまた、自分の先祖はベラルーシのユダヤ人であり、ソ連が独ソ戦に勝たなかったら、両親はホロコーストに遭い、自分は生まれていなかったろうとして、そうである以上、自分にとってスターリニズムとナチズムは決して等価でなく、スターリニズムの方が「より小さな悪」だったと書いている（Ioffe 2008: xvii）。この言明は、ポーランドやバルト諸国で優勢な「二つの

全体主義」論――スターリニズムとナチズムを等価と見なし、むしろ期間の長かった前者の方の非難に力点をおく――とは真っ向から衝突する考えであり、大きな論争点だが[2]、自己の背景に基づいているだけに、簡単には無視できない重みをもつ。

本書の内容は多岐にわたるが、いくつか興味深い個所をつまみ食い的に紹介してみたい。我流の解釈および補足を付け加えるので、必ずしも忠実な紹介とは限らないことをお断わりしておく[3]。

2　ベラルーシ・ネイション形成の困難な道

本書の第1章から第3章にかけては、言語・宗教・アイデンティティ・文化などといった一連の問題が論じられている。本書の中でとりわけ興味深い部分である。あちこちの章に関連する叙述があり、叙述に重複もあることから、書物の構成に沿った忠実な紹介ではなく、我流にまとめ直して、興味深い点を抜き出してみる。

ベラルーシはポーランドとロシアに挟まれる位置にあり、言語的にも両者の影響を受けやすい。歴史をさかのぼれば、リトアニア大公国時代（13-16 世紀）に、現代ベラルーシ語の祖とされるルーシ語が公的な場で使われたが、これはポーランド＝リトアニア連合王国（ジェチポスポリタ）時代（16-18 世紀）に公的使用から排除され、その伝統はいったん途絶えた。その後、長いこと、現在のベラルーシに当たる地域の都市部はイディッシュ、ポーランド語、ロシア語の世界であり、ベラルーシ語は農民の話し言葉だった。話し言葉には当然地域差があり、西に行くほどポーランド語に近く、東に行くほどロシア語に近い形をとる。19 世紀以降、一部の知識人が文章語としてのベラルーシ語創出を試み始めたが、その際、西寄りの知識人（多くはカトリック）はポーランド語に近い形を標準語化の基礎とし、ラテン文字を使ったのに対し、東寄りの部分ではロシア語に近い方言が広がっており、正教の聖職者たちはキリル文字を使うという食い違いがあり、そのことが単一の標準文章語創出を困難にした。

20 世紀に入って、ベラルーシ語化の試みは 1920 年代（コレニザーツィヤ＝現地化の時代）、1950 年代初頭（ベリヤの短命な「自由化」の試み）[4]、1988-94 年（ペレストロイカか

---

[2] この問題については、塩川（2018 予）参照。

[3] この小文の 1 から 3 にかけては、塩川（2016）を縮約したものだということをお断わりする。

[4] ベリヤは治安警察の長だったため他の政治家たちから恐れられる立場にあったが、それだけにスターリン死去の直後に迅速に政策変更を打ち出し、スターリン時代との違いをアピールしようとした。そこには、テロルの緩和、東ドイツ政策の転換、そしてバルト三国・西ウクライナ・西ベラルーシといった新領土における民族政策の転換などが含まれる。ベラルーシの場合、1953 年 6 月 25 - 27 日の共和国共産党中央委員会総会で、それまでの幹部人事政策・教育政策におけるロシア的偏向が批判された（この総会における発言の大半はベラルーシ語でなされた）。А. Лукашук. Жаркое лето

らソ連解体直後にかけて）と3次にわたって繰り返されたが、どれもあまり成功しなかった。それでも、とにかくソヴィエト政権のもとでベラルーシ語は独自の言語として認定され、「民族の言語」という意識だけは根付いた。

1920年代に標準語化の主導権をとったのはポーランドから流入したカトリック系知識人だったが、その基礎におかれた西寄りの形が住民の多数をなす東寄りの部分で使われている形から遠かった上、上からの政策による「強制的なベラルーシ語化」だったせいもあって、定着しなかった。1933年の政策転換は標準ベラルーシ語の基礎を東寄り（ロシア語寄り）の形に置き直した。これは西寄りのナショナリストからはしばしば「ロシアへの従属」と非難されている。その時期のソ連の民族・言語政策が1920年代の「現地化」からの一定の転換の要素を含んでいたのは確かだが、それを一挙的な「ロシア化」のように捉えるのはやや性急な面がある[5]。ベラルーシ語に即していえば、当時の領土が西ベラルーシを含んでいなかったため、住民の多数派はロシア語に近い東寄りの俗語を使っていた。もっとも、なまじロシア語と近い以上、それならロシア語そのものを習得した方が全国的活躍に有利だということで、この時期に都市に流入し始めたベラルーシ人の多くは、ロシア語を主に使うようになった（但し、語彙はロシア語でも発音はベラルーシ式という混成語＝トラシャンカが主流）。欧米に多い西寄りのベラルーシ・ナショナリストの目からは、ロシア語やトラシャンカを使うのは堕落とされるが、それはイデオロギー的な見方だとヨッフェは指摘する。一般論として、どの方言が上等（純粋）で、どの方言が下等（堕落）というのは純言語学的に決まるものではなく、政治とイデオロギーによるという社会言語学の知見を思い起こすなら、この指摘には妥当な面がある。

西と東で文化および言語が異なるというのはウクライナと似ているが、ベラルーシの場合、西的な部分（特にカトリック）の多くが戦間期のポーランドで同化政策のもと「ポーランド化」したために、現代のポーランドで「ベラルーシ人」とされているのはごく少数になっているし、ベラルーシ本国でも最西部に少数残るだけなので、東的な部分が圧倒的多数という特徴がある。そのため、名目的にはベラルーシ語を民族語と意識しながら、現実の言語使用においてはロシア語を主に使うのが圧倒的という状況になっている（公式統計上の「母語＝ベラルーシ語」率は実態から大きくかけ離れている）。そして、そのことは少数の知識人を除けば「自然なこと」と受け止められているとヨッフェはいう。

ソ連解体直後の1990年代前半には急激な「上からのベラルーシ語化」政策がとられたが、これは「言語的ジャコバン主義」だったと考える人が今では増えている。ロシア語に「もう一つの国家語」の地位を付与する1995年レファレンダムは圧倒的多数の支持を得た

1953-го // Коммунист Белоруссии, 1990, № 7, 8.

[5] この問題については、塩川（2004: 58-61; 2015: 235-237）参照。

が、これはルカシェンコだけのせいだったわけではない。実際問題として、「上からのベラルーシ語化」の強行に無理があった以上、そこからの反動は自然だった。もっとも、それはベラルーシ語化そのものへの反対を意味するわけではなく、漸次的なベラルーシ語化推進をよしとする考えと両立する。その後、ベラルーシ語協会は活動を続けており、ベラルーシ語で主に話す人も徐々に出現しつつある。これがさらに発展するだろうという慎重な楽観主義が正当化される可能性もないではない。ただ、それは粘り強い地道な活動の積み重ねの上に成り立つものであって、上からの法律による押しつけではありえない、というのがヨッフェの主張である。

「西と東」という問題は宗教とも関係している。伝統的に、正教はロシアと、カトリックはポーランドと結びつけられてきた。もっとも、16-19 世紀には、「儀式は正教式だが、教義はカトリック」という独自の宗派ユニエイト（合同教会）が住民の多数を捉えていた。そのユニエイトが消滅した――ウクライナの場合、オーストリア領に入った地域（ガリツィア）にユニエイトが残ったのに対し、ベラルーシではこれに匹敵する地域がなかった――ことがベラルーシ人固有のアイデンティティ消滅の主たる要因だという見方もある。もっとも、ユニエイト存続とベラルーシ人固有意識のどちらがどちらの基礎かと問うのは卵と鶏のどちらが先かというようなものだ、とヨッフェは述べている（Ioffe 2008: 39）。敷衍するなら、元来強固だった民族意識がユニエイト弾圧によって押しつぶされたというよりも、もともとどちらもそれほど強固ではなかったというのが彼の見方のようである[6]。

ベラルーシ・ネイション形成の困難性は、通常ナショナリズムの担い手とされる都市中間層が長らく欠如していた事実に由来する。ロシア帝国期からソヴィエト政権初期を通じて、都市住民の多数はユダヤ人、ポーランド人、ロシア人であり、徐々に都市に住むようになったベラルーシ人も、農村から移動してまもない新住民だった。初期にネイション観念の担い手となった少数の知識人たちは、ポーランドあるいはリトアニアに住むカトリックと、ロシアに親近感を覚える正教徒に分裂していた。そのため、二種類のネイション観が並立する形になり、一方を「本物」とする観点からは他方が「まがい物」と見なされるという関係が生まれた。

都市部でベラルーシ人が本格的に増大したのは、ソ連時代後半の第 2 次大戦後のことであり、その多数派を捉えるナショナル・シンボルはソヴィエト期に形成されたもの――その最大の象徴は 1941-44 年の対ナチ・パルチザン戦――である。つまりネイション意識の

---

[6] この点は、ユニエイトの意義を力説する早坂（2013）の見解とは対照的であり、重要な論争点である。ユニエイトについては、服部（2008）、福嶋（2015）も参照。なお、ヨッフェもユニエイトがロシア帝国で弾圧された事実を無視しているわけではない。その点と関わる一例として、ソ連秘密警察の初代長官ジェルジンスキーは現在のベラルーシ領に当たる地域で生まれたポーランド人だが、子供時代にユニエイト迫害の話を聞いたことが帝政への反逆を決心した一要因になったという逸話が紹介されている（Ioffe 2008: p. 69n.）。

核にソヴィエト的要素がつきまとっているというのが、ベラルーシのもう一つの特殊性である。これに挑戦しようとする西寄りナショナリストは、かつてのリトアニア大公国の伝統をアイデンティティのよりどころとし、白・赤・白の三色旗を国旗とした(1991 年 9 月)。しかし、この三色旗および関連する国章はナチ占領時代に利用されたという汚点があるため、1995 年に取り消されたが、これに代わるものとしてはソヴィエト期のものしかない。他の旧ソ連諸国がソヴィエト期のシンボルを捨てている中で、ベラルーシはそれを復活した唯一の例となった（なお、本書の表紙には、1918 年 3-12 月および 1991 年 9 月-95 年 5 月に利用された国章・国旗とそれ以降の国章・国旗がデザインされており、二つのネイション観がグラフィックに表示されている)。

3　政治意識およびイデオロギー状況

以上では歴史に沿って見てきたが、次に現代の政治意識およびイデオロギー状況に眼を向けたい（ここでは、本書の第 1-3 章のほか、世論調査を取り上げた第 7 章および終章の一部を紹介する)。

ヨッフェによれば、多数派ベラルーシ人の意識の対ロシア親近性は否定すべくもないが、だからといってロシアへの従属が運命づけられているとか、独立をあまり重視していないということになるわけではない。各種世論調査は、ベラルーシ語を尊重する態度があまり広まっていない代わりに、ベラルーシ国家の独立性は尊重するという態度の広がりを示している。そのことが明瞭に示されたのが、2004 年以降のロシアとの経済戦争（天然ガスの価格改訂に端を発した対立）である。元来、ベラルーシのロシアへの統合という考えにとりたてて反撥していなかったベラルーシ国民も、この経済戦争以降、対ロシア独立性維持論に大きく傾斜した。ルカシェンコはこれを巧妙に捉えて、強い語調でロシアを非難し、これによって彼の人気は上昇した。それまでルカシェンコ政権を非難してきた EU 諸国もこの頃から経済関係改善に乗りだしたので、ルカシェンコとしてはロシアと EU を両天秤にかけることができるようになった。

言語と政治意識の間には一定の相関があるが、それはややもすれば想定されがちなように、《ベラルーシ語を主に使う人たちは民族意識が高く、親西欧的・民主的、ロシア語を主に使う人たちは民族意識が低く、親ロシア的・権威主義的》というような形をとってはいない。1980 年代末から 90 年代初頭にかけてベラルーシ人民戦線の指導者だったゼノン・ポズニャク（ジャノン・パズニャク）はヴィリニュス出身のカトリックだが、濃厚な親ポーランド・反ロシア主義を特徴とする彼の言説はベラルーシの在野勢力の間でも孤立し、彼は 1996 年にアメリカに出国した（Ioffe 2008: 64-65)。その後のベラルーシで活動し続けている政権批判的な在野勢力は、どちらかといえばロシア語で発信する傾向がある。

世論調査によれば、ロシア語話者の方がベラルーシ語話者よりもルカシェンコ支持率が低く、EU 加盟賛成率が高い。これは一見したところ逆説的だが、都市部にロシア語話者が多く、ベラルーシ語話者は農村部に多いことを思えば、驚くべきことではない。独立直後の数年間は、ロシア語話者はロシアに追随する保守派だという考えが唱えられたが、近年ではむしろ「ロシア語を話すベラルーシ人リベラル」という人たちの存在が注目されるようになっている。その代表例がスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチだとヨッフェはいう（Ioffe 2008: 82-85）。ベラルーシでロシア語が広く使われているという事実自体はわりとよく知られているだろうが、都市部知識人の間で「ロシア語を話すリベラル」が多数だという指摘は新しいものであるように思える。

複数あるナショナリズムのどの潮流に属するにしてもベラルーシからノーベル賞受賞者の出るのを期待するのは共通の願望であり、その最有力候補がアレクシエーヴィチだというのは、実際に授賞の決まった 2015 年より前の時点でも衆目の一致するところだった。だが、もしロシア語話者が彼女のための宣伝活動の主導権をとるなら、ベラルーシ語至上主義派は「これ〔ロシア語で書くアレクシエーヴィチにノーベル賞を授与すること〕はベラルーシ語を死に追いやろうとするものだ」と非難するのではないかと述べた人がいるということが紹介されている。アレクシエーヴィチ自身、「ベラルーシ人はロシア語を占領者の言語だとは感じていない」、「私は自著で、ベラルーシへの愛をロシア語で伝えているのだ」などと書いているという（Ioffe 2008: 87-88）。

ベラルーシ・ナショナリズムの分類として、原初主義的発想――「ロシア植民地主義からのベラルーシ民族の復活」を目指すという考え――に立つ親西欧派（ポズニャク／パズニャクが代表的）と、「ロシア語を話すベラルーシ人リベラル」の二つが先ず思い浮かべられるが、それらとは別に、もう一つ、「クレオール・ナショナリズム」ともいうべき発想が政権周辺で生み出されつつあるということも指摘されている。大衆の間にロシアへの文化的親近感が根付いており、ロシア語あるいはトラシャンカ（混成語）が大多数の人々によって話されていること、歴史的経験として第二次大戦中の対ナチ抵抗戦争（ソヴィエト体制下でロシアとともに戦った）の記憶が今なお大きな位置を占めていることからして、反ロシア的宣伝は大衆を捉え得ないが、かといって完全にロシアに呑み込まれることを欲するわけでもないという中間的状況の故に、ロシアと西欧のあいだで両天秤をかけるルカシェンコ政権の政策は大衆的支持を得やすい。2004 年のルカシェンコ演説は、われわれはポーランドやバルト三国と違って西欧文化圏の一員ではない、汎ヨーロッパ文明の一部ではあるが、カトリック・プロテスタント文化圏の一部ではなく、ロシアとともに正教圏に属すると強調し、トラシャンカを話す国民に根ざしたクレオール・ナショナリズムを開拓しようとした（Ioffe 2008: 92）。これはイデオロギーとしては洗練性を欠くが、にもかかわらずベラルーシで最も広まったイデオロギーだとヨッフェは書いている。

本書の一つの特徴は各種世論調査データが豊富に紹介されている点にあるが、そもそも権威主義的統治の行なわれている国で自由な世論が表出されるのかという疑問もありうる。この疑問に答えて、著者は、本書が重要な情報源としているのは独立社会経済政治研究所であり、これは政権から白眼視されながら市民の協力によって活動を継続しており、不利な条件にもかかわらず信頼性の高いデータを出しているという（Ioffe 2008: 193-194）。また国民は言論統制下のマスメディアの影響を受けているが、当局の流す情報を国民がすべて無批判に受け入れているというわけではないという事実も紹介され、「世論」を論じる意味は十分あるとされている。

終章で著者は、自分の見地は多くの点でアメリカの主流的見解を批判するものだが、ただ一点についてだけは通説に同意する、但しその理由付けは異なっている、と述べる。というのは、ヨッフェは主流派と同様にベラルーシがロシアと合同せずに独立を維持した方がよいという考えだが、それはロシアと文化的に異質だからでもなければ、ロシアが本質的に非民主的だからという理由でもない。では、なぜ独立維持をよしとするかといえば、あまりにも大きな国家はうまく運営され得ず、ベラルーシのようにコンパクトな国家の方がロシアよりも経済的に成功しやすいし、現に成功しているという。つまり、ベラルーシ国家の独立性維持には彼も賛成なのだが、その論拠が（アメリカで想定されがちな）ナショナリストの議論とは異なるということである。

以上に見てきたように、ヨッフェの見解は欧米で主流的な見方とは多くの点で対照的であり、高度に論争的である。本書にはところどころ首を傾げさせる個所もあり、誰もに賛同されるわけではない。とりわけ問題となるのは、ルカシェンコに甘いのではないかとの疑念だろう。敢えてヨッフェの意図を忖度するなら、おそらく彼はルカシェンコを擁護しようとしているのではなく、むしろ国内の反対派知識人に共感を寄せ、その立場から、欧米の一方的な反政権宣伝はかえって有り難迷惑だと説いているのではないかと思われる[7]。ベラルーシにおけるヨッフェの知人の多くはルカシェンコ支持者ではないし、もし自分がベラルーシに住んでいたらやはり彼を嫌っただろうとも書かれている。しかし、ベラルーシにおけるルカシェンコ支持者と反対者の間には地理的・文化的分断があり、外国に住む自分は両方の立場を理解することができる以上、その両方を伝えるのが自分の義務だというのが彼の考えのようである（Ioffe 2008: 172）。書物の狙いがそのようなものだとしても、その立論が万全かどうかには議論の余地があり、「決定版」というよりは論争的な問題提起だということははじめにも述べたとおりである。それでもとにかくユニークで刺激的な作品だということだけは言えるだろう。

---

[7] アレクシエーヴィチが「ルカシェンコ大統領はわたしたちなんかより、野党の知識人なんかより庶民との対話がずっと上手」と語り、「私はバリケードの間に挟まって両方からたたかれる」と語っている（アレクシエーヴィチ 2016a: 486-487）ことも思い起こされる。

4　アレクシエーヴィチにおける「ソヴィエト人／粗連人（совок）」概念

先に紹介したように、ヨッフェは「ロシア語を話すベラルーシ人リベラル」というカテゴリーの存在を指摘し、その代表例としてアレクシエーヴィチを挙げている。これと関係して興味深いのは、彼女の著作『セカンドハンドの時代』における「ソヴィエト人」ないし「粗連人（совок）」概念である[8]。

「ソヴィエト人」という言葉は、ブレジネフ期のソ連に関するレッテルとして使われることがよくあり、それは人間の個性を摩滅させ、完全に均質化させられてしまった人間類型を指していわれる。やや丁寧にいえば、当時のソヴィエト政権自身が人びとの矛盾や対立の解消を展望し、あらゆる人びとの麗しい一体性と団結を標榜してこの言葉を使ったのに対し、それに批判的な観察者たちが、それは偽りの一体性であり、個性および自由の否定だと指摘する際にもこの概念を使ってきた。しかし、アレクシエーヴィチの描く「ソヴィエト人」の像は、そのどちらとも異なる。人びとの声は極端なまでに多様であり、麗しい一体性もなければ、無個性で画一的な存在でもない。そこに秩序だった自由はないが、いわば粗放な自由がある。彼らの生きてきた経路も、現在おかれている状態も、いだかれている感覚や思いも非常に多様であって、決して単色ではないことが彼女の著作では活写されている。そのように多様でありながら、ある特定の時代を生き抜く中で共通の体験をしてきたという限りで、そこには一種独自の共通性がある。これは、ソヴィエト社会に関する文化人類学的考察に貴重な素材を提供するものであるように思われる[9]。

「ソヴィエト人」を形容する言葉として、現代ロシアで流通している新語の「粗連人（совок）」という表現も『セカンドハンドの時代』の中で使われている。これは蔑称だが、著者はその蔑称を他人に貼り付けるレッテルとして使うのではなく、むしろ自らのものとして引き受けようとしているように見える。今日の価値基準からすれば軽蔑とか非難の対象とされるものであっても、それが自分たちの人生の核をなしてきた以上、単純に忘れ去るわけにはいかない。だからといって、それを復権させようとしたり、単純に懐かしむというわけでもない。むしろ、本格的に清算するためにも、それをあっさりと忘れることなく、意識の中で反芻してこそ、新しい未来に向かって進むことができるという感覚が著者を突き動かしているのではなかろうか。

---

[8] この節について、より詳しくは塩川（2017）参照。

[9] ソ連時代に関する文化人類学的研究としてはいろんなものがあるが、ユニークな観察として広く注目を集めている作品に、アレクセイ・ユルチャクの『なくなるまでは永遠だった』（Yurchak 2005）がある。この本については、塩川（2010）も参照。ユルチャクとヨッフェの間には緩やかな共通性があるように思われる。これらとはだいぶ趣を異にするが、ウズベキスタンにおけるオーラル・ヒストリーの集成として、ダダバエフ（2010）も興味深い。

「ソヴィエト人」のもう一つの意味として、さまざまな民族に属する人たちが民族間の差異を持ちつつも、そうした異質性にもかかわらず共通経験を持ってきた限りで、彼らの総称としてそう呼ぶことができるという面がある[10]。アレクシエーヴィチの著作に登場する人たちのうちの最大多数はロシア人だが、他の諸民族に属する人びとも決して少なくない。タジク人もいれば、ユダヤ人もおり、チェチェン人も出てくる。グルジア人とアブハジア人の対抗とか、アルメニア人とアゼルバイジャン人の対抗といった関係も描かれている。それらの諸民族は決して麗しい団結の関係にあるわけでもなければ、民族的個性を失って均質化したわけでもなく、むしろ極端なまでの多様性と、時として激しくぶつかりあうような異質性をもっているが、それでも互いに無関係な存在ではなく、「ソヴィエト人」もしくは「粗連人」と呼ぶしかない共通の刻印を帯びている。

著者のアレクシエーヴィチ自身、単純な紹介としては「ベラルーシ人」ということになるが、彼女のアイデンティティはそういうだけでは片付けられない複層性をもっている。生まれたのはウクライナであり（父はベラルーシ人、母はウクライナ人とのこと）、その取材対象は広大な旧ソ連各地にわたっている。彼女のもう一つの代表作『戦争は女の顔をしていない』も、ことさらにベラルーシだけに特化した戦争体験というわけではなく（ベラルーシが全土にわたって戦場となった以上、そこでの取材がかなり大きな比重を占めているのは自然だが）、旧ソ連全体としての戦争体験の取材になっている。そして、彼女の著作はどれもロシア語で書かれている（おそらく聞き取りも、基本的にロシア語で行なわれたものと思われる）[11]。ヨッフェが彼女のことを「ロシア語を話すリベラル」と特徴付けたのもむべなるかなと思われる。

もちろん、このことはロシア語以外の言語を排除する趣旨では決してない。さしあたりロシア語を共通語として用いつつ、狭義のロシア人に限らず多様な民族に属する人々――まさしく「ソヴィエト人／粗連人（совок）」――の声を、その多様性を保存しつつ、聞き取り、再生することを彼女は自己に課しているように見える。そこでは、ソ連時代を生きた人たちを特定の角度から裁断するのではなく、なかなか語られにくい声を丁寧に拾い上げる作業が積み重ねられ、それらがポリフォニックに再生されている。彼女の著作の意義

---

[10] かつて民族の差を超えた「ソヴィエト人」という概念が提起されたことがあるが、それは単一の民族を含意する советская нация ではなく、諸民族の差を含みつつそれらを包括する概念として советский народ と呼ばれた。一部に「民族融合」の観点から советская нация という用語を使おうとする提唱もあったが、これは公式に否定された（塩川 2004: 75-76）。

[11] アレクシエーヴィチの文学上の師にあたるアレシ・アダモヴィチ――ペレストロイカ期にはベラルーシを代表する知識人として活躍した――も、著作は主としてロシア語で行なっている。もう一人の有名なベラルーシ文学者ワシーリー・ブィコフ（ブィカウ）は主としてベラルーシ語で書いているが、自分の息子たちをベラルーシ語で育てることはできず、親子の会話はロシア語だったとのこと（Ioffe 2008: 47）。

はこういう点にあるのではないだろうか。

（追記）2017 年 11 月 1 日に東京外国語大学で開かれた国際シンポジウムにおける越野剛氏の報告からは多くのことを学んだが、特に『セカンドハンドの時代』のなかの「ロミオとジュリエット……ただし彼らの名前はアブリファーズとマルガリータ」という断章についての言及は印象的だった。アゼルバイジャン人男性と結婚したアルメニア人女性の「信じがたく残酷で美しい物語」の末尾で、語り手が「あなたは信じてくださいますか？」と問いかけるのに対して、聞き手（＝アレクシエーヴィチ）は「信じます――わたしはあなたとおなじ国で育ったのですから」と答えている（アレクシエーヴィチ 2016b: 404）。越野氏はアレクシエーヴィチの著作を「内容」よりも文学作品としての「形式的側面」から分析したが、「内容」の方に関心をもつ観点からいえば、ここで言われている「おなじ国」とはソ連のことだという事実に関心が引かれる。いうまでもなく、この聞き取りが行なわれた時点においてソ連という国はもはやなく、アルメニアもアゼルバイジャンもベラルーシもそれぞれ別の国になっている。しかし、かつてそれらを包括するソ連という国があり、その中で哀しみや悩みをともにしてきた経験があるからこそ、アレクシエーヴィチは「わたしはあなたとおなじ国で育ったのです」と言い、語り手の物語を他人事としてではなく我がことのように受けとめることができる。もちろん、ここに表出されているのはソ連時代の美化でもなければ、単なるノスタルジーでもない。そうではなくて、アルメニア人、アゼルバイジャン人、ベラルーシ人、ウクライナ人等々が様々に分かれつつも共通の悲劇を体験してきたという事実に基づいて、相手の語りを理解し、信じることができるという感受性である（ついでにいえば、そのような対話は共通語としてのロシア語によって可能となっている）。彼女の描く「ソヴィエト人」像はそうした感受性の上に成り立っているのではないだろうか。

Guthier, Steven L. 1977a. “The Belorussians: Naitonal Identification and Assimilation, 1897-1970,” Part I, *Soviet Studies*, vol. 29, no. 1.

---- 1977b. “The Belorussians: Naitonal Identification and Assimilation, 1897-1970,” Part II, *Soviet Studies*, vol. 29, no. 2.

Ioffe, Grigory, 2003a. “Understanding Belarus: Questions of Language,” *Europe-Asia Studies*, vol. 55, no. 7.

----, 2003b. “Understanding Belarus: Belarusian Identity,” *Europe-Asia Studies*, vol. 55, no. 8.

----, 2004. “Understanding Belarus: Economy and Political Landscape,” *Europe-Asia Studies*, vol.

56, no. 1.
---, 2008. *Understanding Belarus and How Western Foreign Policy Misses the Mark*, Rowman & Littlefield.

Marples, David, 1996. *Belarus: From Soviet Rule to Nuclear Catastrophe*, Macmillan.
----, 1999. "National Awakening and National Consciousness in Belarus," *Nationalities Papers,* vol. 27, no. 4.

Matsuzato, Kimitaka, 2004. "A Populist Island in an Ocean of Clan Politics: The Lukashenka Regime as an Exception among CIS Countries," *Europe-Asia Studies*, vol. 56, no. 2.

Urban, M. and Zaprudnik, J., 1993. "Belarus: a Long Road to Nationhood," in Ian Bremmer and Ray Taras (eds.), *Nations and Politics in the Soviet Successor-States*, Cambridge University Press.

Wexler, Paul, 1985. "Belorussification, Russification and Polonization Trends in the Belorussian Language 1890-1982," in Isabelle T. Kreindler (ed.), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future,* Mouton de Gruiyer.

Yurchak, Alexei, 2005. *Everything Was Forever, Until It Was No More: The Last Soviet Generation,* Princeton University Press（『最後のソ連世代――ブレジネフからペレストロイカまで』みすず書房、2017 年）

Zaprudnik, Jan, 1989. "Belorussian Reawakening," *Problems of Communism*, Vol. 38, No. 4.
----, 1993. *Belarus: At a Crossroads in History*, Westview Press.

Фурман, Д. и Буховец О. 1996. Белорусское самосознание и белорусская политика // Свободная мысль, № 1.

アレクシエーヴィチ、スヴェトラーナ 2016a. 『戦争は女の顔をしていない』岩波現代文庫.
同　2016b. 『セカンドハンドの時代――「赤い国」を生きた人びと』岩波書店.
越野剛 2014.「ハティニ虐殺とベラルーシにおける戦争の記憶」『地域研究』第 14 巻第 2 号.
ダダバエフ、ティムール 2010. 『記憶の中のソ連』筑波大学出版会.

服部倫卓 2004a.『不思議の国ベラルーシ――ナショナリズムから遠く離れて』岩波書店.
同　2004b.『歴史の狭間のベラルーシ』（ユーラシア・ブックレット）東洋書店.
同　2008.「ベラルーシ国民史におけるユニエイト教会の逆説」松里公孝編『講座　スラブ・ユーラシア学』第3巻、講談社.
服部倫卓・越野剛編 2017.『ベラルーシを知るための50章』明石書店.
早坂真理 2013.『ベラルーシ――境界領域の歴史学』彩流社.
福嶋千穂 2015.『ブレスト教会合同』群像社.

塩川伸明 2004.『民族と言語――多民族国家ソ連の興亡Ⅰ』岩波書店.
同　2010.「《成熟＝停滞》期のソ連――政治人類学的考察の試み」（東京外国語大学）『スラヴ文化研究』第9号.
同　2015.『ナショナリズムの受け止め方――言語・エスニシティ・ネイション』三元社.
同　2016.「グリゴリー・ヨッフェのベラルーシ論」
同　2017.「アレクシエーヴィチ『セカンドハンドの時代――「赤い国」を生きた人びと』を読む」
（上記2点はいずれも、塩川伸明ホームページの「新しいノート」欄に収録。http://www7b.biglobe.ne.jp/~shiokawa/notes2013-/）
同　2018予.「歴史・記憶紛争の歴史化のために――東アジアとヨーロッパ」橋本伸也編『紛争化させられる過去――アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化（仮題）』岩波書店.

Some Thoughts on Belarus' and Svetlana Alexievich, with Reference to Grigory Ioffe's Work

SHIOKAWA Nobuaki
(Professor Emeritus, The University of Tokyo)

This paper aims at presenting an outline of a book on Belarus' written by Grigory Ioffe, an ex-Soviet Jewish-Belarusian scholar. Although he was born and brought up in Moscow, he frequently visited Minsk, where many of his relatives live. Therefore, his knowledge on Belarus' is based on close observation and personal experience. At the same time, not being an ethnic Belarusian, he distances himself from Belarusian nationalism, which makes his argument unique and controversial. One of his characteristic argument concerns the relationship between language use and social attitude. While some Belarusian nationalists argue that those who usually speak Russian instead of Belarusian must be old-fashioned Soviet-type people, Ioffe points out that there are many liberal Belarusians who speak Russian. One of the representatives of them is, according to him, Svetlana Alexievich, the 2015 Nobel prize laureate. In this connection, the last section of this paper is devoted to an attempt at analyzing her concept of "Soviet people."

国際シンポジウム「文化の汽水域
～東スラヴ世界の文化的諸相をめぐって～」
報告集

2017 年 12 月 31 日発行

〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学　沼野恭子研究室
編集：前田和泉、巽由樹子、福嶋千穂、原真咲
ポスター・表紙写真：井伊裕子
デザイン：原真咲
印刷：株式会社 メルリンクス